

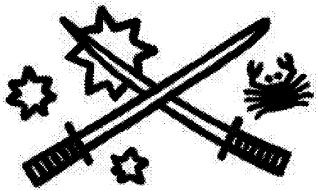
がん社会 を診る

中川 恵一

実際に触ってみると分かりますが、がんは岩のように硬い塊です。がん細胞は、分裂速度が非常に速いため、細胞の密度が高くなるからです。

がんを英語で、蟹(かに)や蟹座を意味するキャンサーと呼ぶのもがんが硬いからで、蟹といっても、毛ガニではなく、ごつごつとしたタラバガニのイメージです。医学の父と呼ばれる、古代ギリシャの名医ヒポクラテスが、進化した乳がんがカニの甲羅のように硬いことから、「カルキノス(カニ)」と名付けたことに由来します。1908年(明治41年)に創立され、日本初のがん専門の研究機関である公益財団法人がん研究会は蟹をシンボルマークとして使っています。

江戸時代には「乳がん」を「乳岩」と書くこともありました。四谷怪談の「お岩さん」も、頬(ほお)の奥にできる



イラスト・中村 久美

江戸時代は「乳岩」だった

上顎がんだったと思われる。診断法も治療手段もなかったため、頬の皮膚にまで岩のようながんが顔を出してしまったのでしよう。

1895年、レントゲン博士がエックス線を発見し、身体の内부를観察できるようになりました。それまでは、がんといえば、洋の東西を問わず、「見て触れる」乳がんを指していました。江戸時代には、肺がんや胃がんといった病名は存在しませんでした。もっとも、がんは一種の老化ですから、人間50年といわれていた昔は、がんで亡くなる人は、今と比べてはるかに珍しかったことでしょう。

それでも、がんで亡くなったと思われる歴史上の人物は少なくありません。たとえば、武田信玄は三方原の戦いで、徳川家康を圧倒し、天下は目の前でした。しかし、一説には、この時すでに末期の胃がんに侵されていたといわれ、翌年に世を去っています。

一方の徳川家康は、大坂夏の陣で豊臣家を滅亡させ、天下統一を成し遂げた翌年、亡くなりました。死因は、信玄と同様、胃がんだったと思われる。鯛(たい)の天ぷらの食あたりが死因ともいわれますが、死亡したのは、天ぷらを食べてから3カ月近くたってからです。胃がんが大きくなって天ぷらが詰まってしまったのでしよう。徐々にやせてきていたこと、侍医が腹部のしこりを触れていたことなどから、胃がんで死亡した可能性が高いといえます。

(東京大学病院准教授)